

# 探訪 北の風景 52

## マリンブルーの海と岬 後志管内積丹町

青木和弘

積丹半島は、江戸時代の1706年(宝永3年)、和人とアイヌの商いが始まり、それからニシン漁で栄えた。ニシン漁の繁栄を象徴するのが、ここ発祥とされるソーラン節である。

日本海のニシンは1950年代半ばに激減し、漁は幕を閉じ、その後は過疎の道を歩む。半島の先端を占める積丹町の人口は、1970年に6102人だったのが、現在は2083人(2018年5月末現在)である。

この海の色はシャコタンブルーと呼ばれ、透明度が高く美しい。周辺には温泉も豊富で、夏のウニに象徴される鮮度抜群の魚介がうまい。

積丹が大好きな私が必ず訪れるのが島武意(しまむい)海岸だ。広い駐車場に車を止め、遊歩道のトンネルを抜けると大きな岩が突き立つマリンブルーの海が広がる。海は透明度が高く海底が透けて見える。海岸まで長い階段があるが、断崖を見下ろして帰路を思うと、躊躇してしまった。海岸は一面、大きな玉石である。そこに立派な石組みが残っていて、ニシン漁が盛んだったころの建造物の跡だという。

この後目指すのは、当然、「うに井」である。近年、海水温が上昇しているためか、ウニ漁がひどく不振だという。価格が高騰している。うに井発祥の店「お食事処みさき」(積丹町日司町236、電話0135・45・6547)の名物、「赤ばふん生うに井」は、1日20食限定で、何と1杯5400円に高騰していた。ムラサキウニの「生うに井」は2800円だ。限定品は観光客の皆さんにお譲りすることにした。

その後は、いつも訪れる温泉である。神威岬へ向かう途中にある「温泉旅館北都 天然温泉シララ姫の湯」(積丹町西河町14の2、電話0135・46・5800)だ。浴槽は小さめだが名湯である。ナトリウム・炭酸水素塩泉(旧泉名・重曹泉)だが、二酸化炭素が655・5ミリグラム/リも含まれ、湯につかると体表が小さな泡に包まれる。泡は血管を拡張して血行を良くするのですごく温



気泡が身体を包むシララ姫の湯は源泉掛け流しの名湯。温泉が好きな方は、ぜひ立ち寄りしてほしい

まる。40度ほどの源泉がそのまま掛け流しされる絶品の湯である。ここは、釣り人にはよく知られた宿である。

次に目指す神威岬まで7・4キロ。ここでは、ソフトクリームを食べながら遊歩道を行くと右手に「電磁台」がある。これは太平洋戦争中に設置されたレーダー跡である。

遊歩道に戻って進むと間もなく「女人禁制の門」がある。もちろんいまは女性も通ることができ、一つの伝説が残る。日高の首長の娘チャレンカが、源義経を慕って追ってきたが、海の果てに去ったことを知り断崖から身を投げた。チャレンカの嫉妬心が女性を乗せた船を転覆させるので、岬一帯が女人禁制になったという。でも、この話は眉唾だという。和人が移住するとニシン漁の権





夏はエゾカンゾウが咲き乱れ、冬季はオオワシやオジロワシもやってくる



以前に食べた、お食事処みさきの「赤ばふん生うに丼」。パフンウニは赤味が強く味も濃い。しょう油を使わなくても美味しい。ぜひまた、ざぶざぶといただきたいものだ

益が奪われると怖れた松前藩が流した作り話で、1855年（安政2年）に蝦夷地一帯が幕府直轄になると、女人禁制は解かれ、奥地への定住が進んだという。

女人禁制の門は、開門時間が決められているので閉門前に戻らなければならない。7月は8〜18時、8月は8〜17時半だ。ここから岬尖端までは約700メートルだが、アップダウンが多く、せつせと歩いたつもりでも片道20分ぐらいかかる。スチール製の階段があり、ヒールの細い靴はひっかかりそうだ。柵はあるが、断崖の上の道は高度感があるので、高所恐怖症ぎみの人には勧めない。私は、時間がないこととして、適当なところで引き返したが、岬の雰囲気は大いに楽しめた。

この旅、「赤ばふん生うに丼」だけが心残りだ。